令和５年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立 大宮北 高等学校 ）

学校番号　ｓ４９

目指す学校像	ＳＳＨ指定校として「自主・自律・創造」の校訓のもと、自ら育んだ高い「志」を実現し、次代を担い国際社会をリードする人材を育成する。

重点目標	
	１　ＳＳＨ指定校としての取組を起点に、全校生徒の「志」を育み、一人ひとりの第一志望の進路を実現する。 ２　自ら課題を発見し、解決する主体的な学習態度を育てるとともに、授業の質を向上させ、社会のリーダーとなる確かな学力を身に付けさせる。 ３　北高生としての品格を高め、健全な心身と豊かな人間性を育む。 ４　地域の理数教育拠点校として活動すると同時に、グローバルな研究活動を展開して国際社会へ開かれた学校に発展させる。

達成度		
	A	ほぼ達成（８割以上）
	B	概ね達成（６割以上）
	C	変化の兆し（４割以上）
	D	不十分（４割未満）

学校自己評価								学校関係者評価
年度目標					年度評価			実施日令和　年　月　日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	＜現状＞ ○第Ⅱ期 SSH の２年目に入る。第Ⅰ期と比較して、課題研究の深さや広さ、対応教員の教科・科目も広がっている。探究的な学びと親和性の高い ICT（ﾀﾌﾞﾚｯﾄ端末）を活用して、学びを深化させている。 ○昨年度、大学入学共通テストは３年生の９６％にあたる３００名が受験した。東工大への現役合格者が２名、国立大学医学部医学科に１名合格し、国公立大学合格者は現浪合わせて４０名、早慶は７名合格した。学校として国公立大学合格は年々増加し、生徒の学力は着実に伸びていることが分かる。 ＜課題＞ ○新学習指導要領を踏まえた、本校の課題研究型授業の構築が大きな課題である。教職員の探究的な学びに係る研修により、指導方法の蓄積と共有が必要である。また、SSH 推進部やカリキュラム委員会はもとより、全職員一丸となった意識づけ、対応が必要である。 ○本校の SSH、授業や部活動、市教委の各種プログラムへの参加など、生徒は主体的、積極的に取り組んでいる。また、教職員も熱心に準備や運営に取り組んでいる。それらを学校内外に伝えるための情報発信の工夫が必要である。	SSH 校として外部人材・組織との連携	①SSH 基礎枠を活かしたフィールドワーク、課題研究プログラムを推進する。 ②福島県の企業とともに街の復興を目指すプロジェクト「HAMADOORI REBORN」を２学年生徒全員が実施する。 ③大学や企業と連携し、専門的な知見を得る学びを推進する。	①各種フィールドワークの参加者数、参加満足度、コンピテンシー検証、生徒及び学校自己評価 ②「HAMADOORI REBORN」における連携企業及び自治体、生徒のプレゼン内容、現地校との交流 ③連携した大学、内容。大学の先生や学生との交流回数及び人数。研究内容、生徒及び学校自己評価				
		高い「志」の育成と進路実現	①生徒の「志」を高めるため、進路指導部による組織的、計画的なキャリア教育を実施する。 ②自主学習を習慣化し、時間管理の意識を高めるための実践を行う。 ③Classi、スタディサプリ、模試復習サイトの活用を促す。 ④補習(前期・長期休業・後期)の積極的な参加を呼びかける。模試の映像講座等の活用を促す。 ⑤共通テストや新学習指導要領に対応した進路情報を、学年団と協力して、保護者に対しても情報発信する。 ⑥進路希望調査及び個人面談を実施し、その内容を学年・進路指導部で共有して指導する。	①LHR や総合的な探究の時間等での進路に関する授業及び行事の実施状況 ②朝学習の取組状況、勉強マラソンの参加状況、自習室等の利用状況、定期的な学習状況調査 ③スタディサプリの利用状況、宿題配信の活用 ④参加者数、年間３０講座以上の進学補習の開講 ⑤保護者に対する進路情報の内容、時期及び方法、PTA との連携 ⑥進路希望調査と個人面談の情報共有、組織的な相談体制の状況				
2	＜現状＞ ○全生徒が持っているﾀﾌﾞﾚｯﾄ端末を利用して、授業にて学習支援ソフト、テレビ会議アプリなどを使い、効率的・効果的な指導方法を研究し、アクティブラーニングを推進している。 ○昨年度、課題研究「STEAMS TimeⅠ」を行い、教科横断型課題研究を実践した授業を展開した。 ○新学習指導要領実施２年目となり、各教科においての評価規準のたて方、保護者や生徒への周知の方法について、指導と評価の一体化を目指し、研究を進めている。 ＜課題＞ ○物価高の影響を受け、海外との交流事業について安価でかつ効果的なプログラムになるよう、現地スタッフとの連絡・調整を欠かさない。 ○全体・個人の well-being につながることを目指し、教職員の仕事のやりがいと負担軽減のバランスをどこに定めるか課題となっている。 ○担当者の入れ替わりを考慮し、業務の引き継ぎを含め、さらなる効率化を図る。	ICT の強みを生かした授業力向上と情報発信	①「STEAMS TimeⅠ/Ⅱ」を複数教科の教員が担当し、生徒の探究的な学びのニーズに合わせ、指導・助言する。 ②授業の目的に応じて ICT 機器を活用し、授業支援サービスやテレビ会議アプリを利用した教育実践を行う。 ③HP 等を活用して、学校の情報を発信する。 ④学校説明会の内容を充実させ、受験生や保護者が学校に対する理解を深められるように情報提供する。 ⑤教員の主体的な研修を促進し、指導力の向上を図る。	①「STEAMS TimeⅠ/Ⅱ」に関わった教員数、研究発表数、研究内容、発表方法、周知の方法 ②授業支援ソフトやテレビ会議アプリの使用状況、利用割合。ICT の効果的な授業実践の蓄積 ③学校 HP の毎週１回以上の更新 ④学校説明会の前年度参加者数と今年度参加者数 ⑤管理職と全教員との面談による研修計画・実施の確認				
		国際交流の推進	①海外派遣事業、留学生受け入れ、SSH 海外プログラム、さくらサイエンスを実施し、学校全体での取組を推進する。	①外国数、海外生徒受入数、交流した本校生徒数、参加満足度、コンピテンシー検証、生徒及び学校自己評価、受入対応教員数				
		負担軽減を意識した業務遂行	①教職員負担軽減のための各種業務のデジタル化を図るとともに、使用するアプリの種類を統合する。	①デジタル教科書・指導書、デジタル採点、学習動画配信等の利用状況、アプリの利用状況				
3	＜現状＞ ○「自主・自律・創造」の校訓のもと、多くの生徒は落ち着いた高校生活を送っている。 ○自転車通学、交通機関を利用した通学ともに、多くの生徒は安全に登下校をしている。 ○教育相談の件数が、年々増加している。 ＜課題＞ ○生徒自ら学校生活の中で主体的に判断し、行動できるような活動をもっと増やす必要がある。 ○事故件数を減らすこと、自転車ヘルメット着用率を今より高める必要がある。 ○教育相談が必要な初期の段階で、専門家と相談できる体制づくりを今より強固にする必要である。	安心、安全な高校生活	①ヘルメット着用点検、挨拶運動、登下校マナーアップ、駐輪マナーアップを行う。 ②携帯・インターネット安全教室を年度当初に実施し、年間を通じて生徒のネットモラルの向上を図る。 ③学校内の危険箇所を把握するとともに、早期改善の必要性があれば早急に修繕等を行う。	①風紀委員を中心とした生徒主体の活動。登下校、挨拶について学校関係者、近隣住民からの評価 ②携帯・インターネット安全教室の実施。トラブル数の減少 ③管理職及び事務室等による敷地内及び校舎内の定期的な安全点検、修繕の実施				
		学習環境の整備	①清掃時、ゴミステーションやリサイクルステーションで、ゴミの分別を行う。 ②清掃の必要な情報、破損箇所等の情報を、教職員で迅速に共有する。	①保健委員を中心とした生徒主体の活動。クラスへの指導 ②校内ネットワークで適宜配信、共有、対応				
		教育相談との連携	①教育相談委員会を各学期で定期的に実施する。 ②教育相談や特別支援教育に関する理解を深める。	①教育相談委員会の各学期実施。 ②教育相談や特別支援教育に関する研修の実施				
4	＜現状＞ ○SSH において今年度より科学技術人材育成重点枠の指定を受け、海外連携事業の開発を推進し、生徒に提供する。 ○第Ⅰ期 SSH から地域の理数教育拠点校として、「自由研究サポートプログラム」「ASEP JHS」「サイエンス教室」など行っている。 ○令和４年度から市内の小中学校は「STEAMS TIME」を実施し、本校でも令和４年度から「STEAMS Time Ⅰ」を１学年で実施している。また、令和５年度から「STEAMS Time Ⅱ」を２学年で取り組む。 ＜課題＞ ○さいたま市独自の「STEAMS TIME」について、１２年間のつながりを意識し、系統性、発展性を目指した授業を研究する。 ○海外の現地校とのお互いにとって充実したプログラムとなるよう、体験プログラムや事前研修の計画を立て、継続的に実践する必要がある。	SSH 校としての地域の理数教育拠点校としての取組	①「自由研究サポートプログラム」「ASEP JHS」「STEAMS PARTY」「サイエンス教室」など、地域の小中学生プログラムを開催する。 ②市内の小中学校の「STEAMS TIME」から、本校の課題研究「STEAMS Time Ⅰ/Ⅱ」までの１２年間のつながりを意識し、系統性、発展性を目指した授業を研究する。 ③学校運営協議会や SSH 運営指導委員会を実施し、地域や理数の専門家から指導・助言を得る。	①プログラムへの小中学校の参加校数、参加者数、参加満足度、参加教員数 ②「STEAMS Time」に関する内容及び取組について、市内外の小中学生や教員との意見交換の内容及び回数、振り返り ③学校運営協議会及び SSH 運営指導委員会の回数、意見交換の内容、振り返り				
		SSH 校としてのグローバルサイエンスリーダーの育成	①グローバルな課題を知り、解決しようとする態度を育むために、英語ネイティブ教員による学校独自の「BEST CLaSS」の授業や「GC4S」の取組を行う。 ②SSH 重点枠を活かして、ハワイ、インドネシア、台湾との海外サイエンス研修で、海外の高校生と共同研究やフィールドワークを行う機会を複数回設ける。	①「GC4S」の参加者数、参加満足度、コンピテンシー検証、生徒及び学校自己評価 ②海外との Online 事前研修の回数、内容、生徒及び学校自己評価。当日及び事後の参加満足度、コンピテンシー検証。ユネスコスクールへの登録申請				